もえるゴミの日

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もえるゴミの日

【Nコード】

N3035M

【作者名】

栖坂月

【あらすじ】

オレは誰もが認める自宅警備員である。姉は一部の人間しか知らない隠れヲタである。必然という運命の歯車は無情にも回り始める。大掃除という形を成して。

（前書き）

本作品は筆者の個人的趣味とは何一つ無関係であることを明記しておきます。

また、特定の作品を揶揄する目的で執筆されたものでもありません。この作品における扱いに不満がありましたら、どうか現実を直視していただくことを切に願います。

つまり、細かいことは気にしないでね

それと、今回の作品は極めて狭い世界の出来事なので、一応までに注釈を設けることといたしました。併せてお楽しみ下さい。

「本日はもえるゴミの日！」

チャットとネットゲで完徹したオレを、二歳年上の姉が襲撃する。ふと時計を見ると午前八時二十分、そろそろ寝る時間だ。

「姉ちゃんまた寝ぼけてるの？ 燃えるゴミの日は明後日じゃない。ちなみに今日は日曜日、燃えるゴミの収集日は火曜日である。自宅警備員の俺が担当する数少ない雑務の一つだ。間違える道理もない。ニートやってると曜日の感覚がなくなるぜ、みたいな話を見かけることもあるが、オレにそんな死角はなかった。

「字が違うつ。もえるゴミとはすなわち、オタク物品のことだ！」

「ああ、萌えるゴミって意味か」

納得した。

「で、何するの？ 古いジャンプとか捨ててくれるの？」

「違うつ。そんな生易しいもえるゴミに興味はない。私はね、武、たけし貴方の将来を心配しているの。このままニート街道をほくしん驀進して、その先に何が待っていると言うの？ 貴方はまだわからないかもしれないけど、社会というのは厳しいものよ。特に貴方のような、世間知らずの駄目ニートには厳しいものなの。そんな下らないもえるゴミとは早々にオサラバして、今すぐにリアルな幸せを追いかけろべきなのよ。というか、そうしなさいっ！」

何かが原因で情緒不安定に陥った時、弟に八つ当たりするのは姉の基本仕様である。

「……で、本音は？」

「アンタのせいで彼氏にフラれたの！」

何てこった。これは大変マズい事態である。

ウチの姉に限る話ではなく、女という生き物は恋愛への依存度が高い傾向にある。些細な言葉で浮かれたかと思えば、記念日にプレゼントがなかっただけで怒りまくる。そんな生き物が恋愛という住

処を強引に奪われたともなれば、それがどれほどの事態を引き起こすのか察するに余りあるというものだ。

現状が深刻なのは理解した。しかし、一つ確認の必要がある。

「オレのせいって何だよ？」

「洋物のコメデイ見てる時に『みなみけ』の方が面白いって言ったら引かれたんだよ、バカ野郎！」

みなみけネタでバカ野郎を繋ぐ辺り、姉も立派なオタク民である。

「面白いじゃん、みなみけ」

「いやそうだけどさ……じゃなくてっ！」

単純なのは姉の長所だと思うが、時折悪い男に引つ掛かりはしないかと不安にも思う。まあ今のところ、相手はまともな連中ばかりだ。もつとも、まとも過ぎてフラれたとも言えるのだが。

「今まで必死こいて隠してきたけど、血の繋がった弟がニートでヲタという事実は遅かれ早かれバレるのが定め、私はそれを悟ったの」

「別にバレてもいいんじゃない？」

「駄目なのっ。あの何て言うの？ 自分はオタクじゃないみたいなこと言ってるけど、実はコッソリ見てオタク化してるんでしょ、みたいな視線が許せないの！」

いくら何でもそれは自意識過剰というか、単なる被害妄想なのではないかと思うが、ここでそれを言っては火に油、モエブタにピザを無料配達するようなものである。ここはとにかく冷静に、もつれた彼女の心を解きほぐしていくしかないと思う。

「とにかく」

言いながら襖の陰から空のみかん箱を二つ引き寄せ、部屋の隅に並べる。そこにはチラシが貼り付けられており、太字のマジックで『もえるゴミ』『もえないゴミ』と記されていた。

「勝手に仕分け作業に入らせてもらっから、そのつもりで」

どこで調達したのか、すでに割烹着まで着込んでいる姉はスツカリやる気モードだ。とりあえず、付け込む隙が見付かるまでは静観するよりないだろう。

「さてと、まずエロゲーは全部処分ね」

「えーーーーーっ!」

いきなり修羅場突入である。

「当然でしょ。あんなの害悪よ、害悪」

「だったら姉ちゃんのおい物も捨てるよっ」

「アレはいいの。あんまりエロくないし」

くそー、身勝手な。そもそも、弟がオタクってことより、本人がやおいにハマっている方が余計に引かれるだろうに。次に彼氏が出来たら絶対に暴露してやる。

まあいい。一通りデータはハードディスクにぶち込んであるし、パッケージなんて飾りだしな。それに、終わったエロゲーなんて処分に困ってたくらいだ。丁度良い機会だと思ふことにしよう。

「よし、次はサクサクとアニメ行こうか」

無駄にデカイエロゲーの外箱でみかん箱が一杯になったことが御満悦なのか、意気揚々と次なるターゲットに焦点を合わせる。オレの録画コレクションは金こそ掛かっていないが、手間と労力は十二分に掛かっている。正直、金出せば買えるだけのエロゲーとは愛着が違う。

「ストップパン、いきなりアウトね」

「待て待てっ。理由は？」

「パンツだから」

「パンツじゃねえ。ズボンだ!」

いや、本質的にはそこもどうかと思うのだが、とりあえず礼儀として指摘しておく。

「ふーん、アウト」

くそ、あっさりスルーされた!

「ロザリオとバンパイア³、アウト。それのおとしもの⁴、アウト。おまもりひまり⁵、アウト……ねえ、どうしてアンタのコレクションってパンツアニメばっかなの?」

「誤解を招くようなこと言うな! そもそも、ストップパンはパンツじ

「や」

「はいはい、それはもういいから」

大体、ストパンで判別できる時点で一般人としてはアウトだろうに。しかし、ここでそれを言っても始まらない。これ以上の犠牲者を増やさないために、何とかして打開策を打ち出さなければ。

「別に全部パンツじゃないぞ。みなみけとか違うじゃないか」

「それもそうね。じゃあこれは？」

そう言っただけで差し出されたのは『AIKa』だった。

これはマズい。言い訳が難しい作品を出してきやがった。それともアレか。知っててワザとか。

「ち……違う。これはパンツじゃなくて大股開きだっ」

時が凍りつく。さすがに自分でも、この言い訳はどうだろうと思わなくもない。

「アウトよね？」

「そうですね。アウトですね」

認めざるを得なかった。

「それにしても、パンツアニメなんか見て何が楽しいのかね……こっちは、メイドガイ？」

チャンス到来！

「それはパンツアニメじゃないぞ！」

パンツも出てくるけど。

「アウト」

「なにゆえっ！」

「オツパイも駄目に決まってるでしょ」

呆れた様に言い放ち、お手製のDVDがまたもやみかん箱に投げられる。すでにそこは屍の山だ。生き残った兵は極僅か、しかもオレ的には二軍寸前のラインナップだったりするとところが悲しい。このままではいかん。何か対策を

「おお振り。はセーフね」

「待てコラ！」

「何よ。アウトじゃなくて良かったでしょ」

「アウトにされても困るが、そうじゃなくてっ。明らかに差別だろ。ついこの間、おお振りがいかに萌え作品なのか自分の口から語ったばかりじゃねーか。御自慢の阿部萌えはどこ行った！」

「パンツでもオツパイでもないんだからいいでしょ。健全よ」
「理不尽発言キタよ！」

畜生、女が顔しか見てねーと今更ながらに実感したぜ。

とはいえ、権力的な意味で安易に逆らうワケにもいかない。姉はOL、対するオレはニートだ。家庭内での地位は言うまでもなく姉の方が上である。発言権、優先権など、全てが上位にある。下手に抗議の声を上げようものなら、姉の主張を全面的に通した拳句に『働け』の大合唱が始まるのは目に見えていた。もうしばらくニート生活を続けるためにも、なるべく波風は立てたくないとこのころなのだ。くっ、処分行きを通告されたコレクション達が恨めしそうな顔でこつちを見ているぜ。そんな役に立たない害虫を見るような目でオレを見ないでくれ。オレだってお前達を捨てたいワケじゃない。この戦局において、ある程度の犠牲は止むを得ないんだ。わかってくれ。

「さてと、大分片付いたけど」

明らかに物が減って淋しくなったオレの部屋を見回す姉は、とても楽しそうだ。自分に全く痛みの伴わない八つ当たりなのだ。楽しくて当然だろう。

だが、これでもまだ飽き足りないのか、姉は更なる標的へと視線を定めた。

「あとはあの『萌え箱』だけね」

「もえばこ？」

言ってる意味がわからずに視線を追うと、その先にはニートの必需品、パソコンがあった。

「ノオー！ー！ アレは駄目！ ないと死んじゃうから！」

「死にやしないって」

そうか。その手がある。

だが危険だろうか。もしこれで失敗すれば、もう言い訳は立たないだろう。最後の賭け、そう思っただけ挑むしかない。

「……本当に捨てる気なの？ 姉さん」

「もちろんよ。だっていらぬもの」

「姉さんが見てたヤツ、やってたヤツもたくさんあるよ？」

「もう見ないからいい」

「オレは、また買ってくるよ？」

「そしたらまた捨てる」

「隠しておくよ」

「隠したってバレるの。本当のことはね、結局隠しようがないのよ。そうだ。それは真理だと思う。」

「だったら、姉さんだってバレるよ。隠れヲタだってこと」

「でしょうね。だから今日限りやめる。真つ当な女になるの」

「相手のために？」

「違うわ。自分のためよ」

「じゃあさ」

勝負はここからだ。

「その相手がもし隠してたら？ 実は好きな萌え作品をコレクションしていたら？ やっぱり捨てるの？」

「え、と、それは……」

姉が初めて迷った。

オレのコレクションを躊躇なく捨てるのは、オレが弟だからだ。

もしそれが好きな相手であったなら、事情は違ってくる。まして隠れヲタであることを隠して付き合い続けてきたのだ。相手の心理も理解出来るだろう。

「そんなこと……ない。オタクなんてゴメンだし」

「姉さんだって隠してきたじゃないか」

とうとう沈黙する。おそらく逆の立場で自分と照らし合わせているのだろう。簡単な想像だが、その感情を推し量るのは決して簡単

ではない。プライベートな個性は、十人十色が基本だからである。自分の例が他人に当てはまるとは限らないし、逆もそうだ。だが今は、そう思ってもらおう。

「自分が我慢しているからって、相手にも強要するの？ それとも、相手が趣味に興じている姿を見ながら、自分だけが一般人のフリをして我慢するの？」

「そんな、こと……」

「いいんだよ。姉さんが自分の好きな趣味に没頭したっていいんだ。むしろそんなことを許容出来ない男なんて、一緒にいたってつまらないじゃないか。みなみけが面白いと言って何が悪いの？ 俺もそう思うよって言うてくれる相手を探せばいいじゃない！」

姉の表情から、何かが剥がれた。

それがしがらみなのか、こだわりなのか、それはわからない。ただ、まるで人生の命題に答えでも見付けたかのように、穏やかで晴れやかな空気が周囲を覆っていた。顔に刻まれていた小難しい内情を表現する幾つかの皺も、いつの間にか消えている。

「そう、かもね」

「そうだよ」

「隠してビクビクしながら付き合っても、楽しくないしね」

「そうそう」

「理解してくれる人、探せばいいんだよね」

「やおいもシヨタもオツケーな人はきつといるよっ！」

多分まともな人じゃないだろうけど。

「わかった。姉さん間違ってたよ。ありがと、武」

こうしてオレとマイコレクションは、未曾有の危機を辛うじて脱したのであった。

しかし歴史を以って曰く。

其は繰り返すものなり。

「第二回、もえるゴミの日を開催いたしますっ！」

人間、そう簡単にならなければ苦労はしないものである。

(後書き)

1 無印、おかわり、おかえりと三期に渡って放映された日常系コメディ、原作はヤングマガジンである。春香、夏奈、千秋という三姉妹を中心に、みなみけという空間に出入りする輩の平凡(?)な日常をテーマにしている。ちなみに『バカ野郎』は三女である千秋の口癖。

2 ストライクウィッチーズの略称、タイトル+キャッチフレーズである『パンツじゃないから恥ずかしくないもん!』の頭を繋げてストパンである。作中でパンツ丸出しで飛び回っているのだが、それをズボンであると強引に設定することで問題解決を図ろうとした異色作である。中身は魔女+戦争という感じで意外に真面目。

3 パンツアニメその一、パンチラというよりパンモロ。スカートではなく、もはや腰巻である。全員がワカメちゃんだと思つと理解が早いかもしれない。

4 パンツアニメその二、第二話のエンディングが有名。実はそれしか知らない。ちなみに少し調べてみると、むしろおっぱいアニメかもしれない。

5 パンツアニメその三、アングルが怪しいのは伝統だろうが、比較的正統派のパンチラアニメ(笑)いや、何が正当なのか知らないけど。

6 1997年から作られたOVAシリーズのみの作品だが、この場合は2007年リリースの『AIKa R-16:VIRGIN MISSION』である。ほぼ同一のスタッフによる『ナジカ電撃作戦』はローカル地上波で無謀にも放映されていたので、こちらの方が有名。女エージェントが女ばかりの組織と銃撃戦や格闘戦を行い、敗れた女達は『何故か』大股開きで倒れるという意味不明な作品だった。多分監督の趣味。

7 正式タイトル『仮面のメイドガイ』は、恐らく唯一無二のお

っばいコメディ。ほぼ全てのエピソードがおっばいを起因にしているという潔い作品である。基本的に色物だが、コメディとしては見るべき点も少なくない。

8 正式タイトル『おおきく振りかぶって』は、基本的には極めて正統な、野球を題材にした作品である。しかし同時に腐女子が群がることでも有名になった。実際に見ると、最初から狙ったことだったかと思えなくもない。

見たことない作品もあったので注釈は疲れました。
ちなみに筆者は二トではありません（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3035m/>

もえるゴミの日

2010年10月8日14時30分発行